

次世代へ美しい環境を引き継ぐエコモールへ

さまざまなエネルギーを必要とするショッピングセンターの運営管理。
すべての活動は現状を把握することから始まります。

多大なエネルギーを消費するモールだからこそ、
小さな取り組みも大きな成果を発揮します。



35万8,200世帯

全モールで消費される電力は、
一般家庭の約35万8,200世帯に
相当します。^{*1}



329個

この1年で排出したCO₂は
東京ドーム全体の容積で
約329個分になります。^{*2}



25mプール

21,000以上

年間に使用する水を
まかなうには25mプールが
21,000以上必要です。^{*3}



4,539箱

1年で使ったコピー用紙は
段ボール箱で4,539箱分に
達します。^{*4}



6,703台

年間の廃棄物の重量は
10tトラックで6,703台分に
相当します。

* 共有部分、核店舗、テナントも含むSC全体の数値です。

* 1：一般家庭の年間電力使用量を3,700kWhとして試算しています。 * 2：CO₂1kgの容積を510ℓ、東京ドームの容積を124万m³として試算しています。

* 3：上水道、工業用水、井水の合計。25mプールの容積を375m³として試算しています。 * 4：本社分も含む（地方オフィスを含まず）。段ボール1箱を2,500枚として試算しています。

イオンモールMiELL都城駅前

お客さまの快適さを損うことなく、環境にも配慮した清掃活動を実施



株式会社 アスクメンテナンス **山本 光洋 様・上田 清子 様**

重機を使った清掃は開店前の3時間と閉店後の3時間に集中的に行なっています。毎日「手を入れなかったところ」がないようにして、汚れを蓄積させないことが大事ですね。特にお客さまの動線となるフロアやレストラン街などは重点的に作業をしています。

清掃には環境への負荷が少ないとされるバイオ洗剤を使用しています。ノンリンス、つまりすすぎが不要になることで使う水の量を少なくできます。また、拭き掃除では通常の水道水より汚れ落ちがよいアルカリイオン水を使用することで水道の使用量を抑えています。洗面台などを清掃する際にはセンサーに反応して水を出さないようにも気をつけています。

清掃に完璧はありませんが、お客さまの「わあ、きれいだね」という声が入るととても嬉しくなりますね。これからも、いっしょ来店されても気持ちのいいモールにしていきたいと思っています。

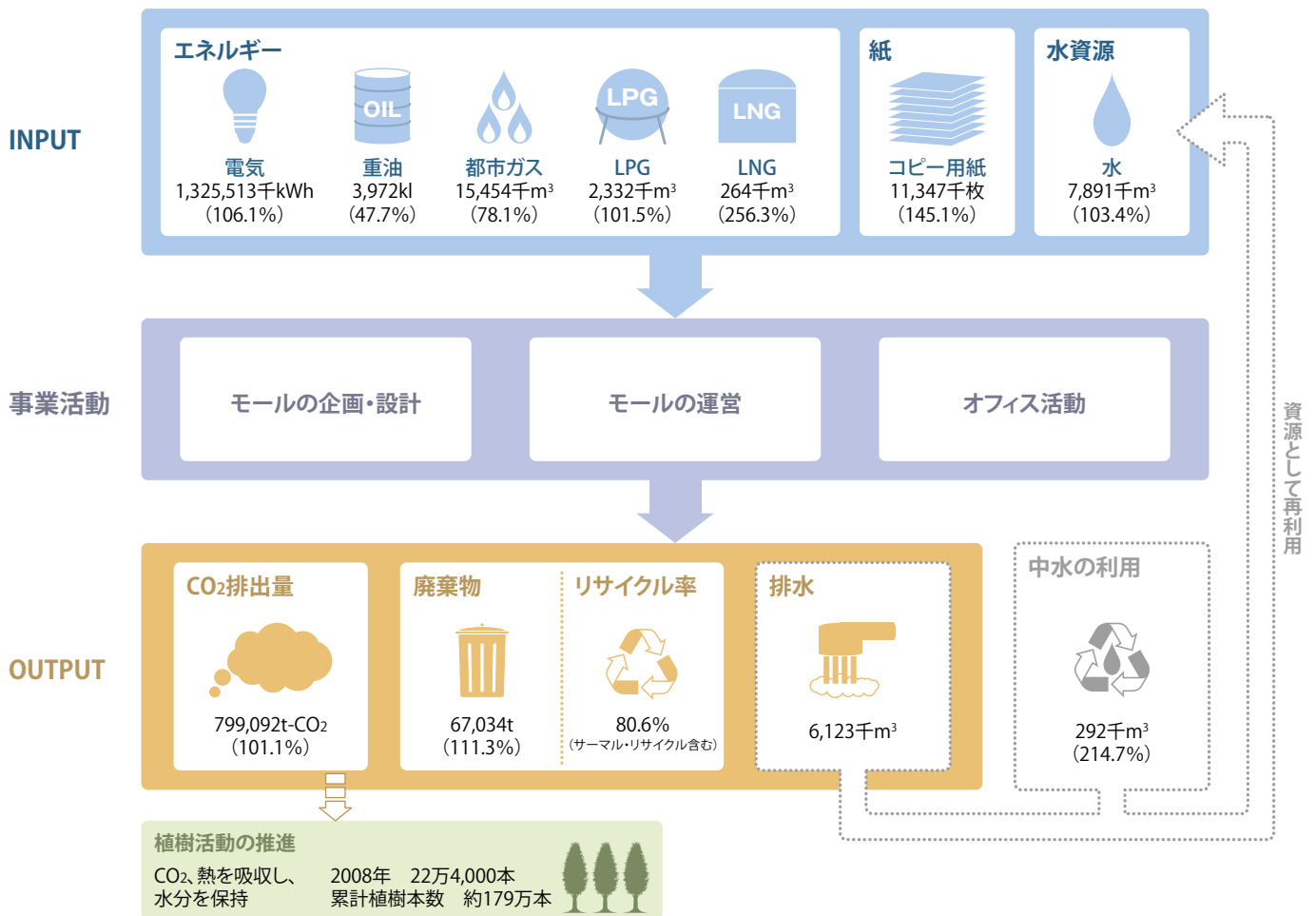




2008年度インプット/アウトプット(国内48SC)

2008年度はCO₂係数の高いエネルギー(重油、都市ガス、LPG)からCO₂係数の低いエネルギー(電気)への転換が着実に進みました。水は、浄化槽中水の活用が増えています。コピー用紙の使用量はJ-SOXの浸透により増加していますので、これを抑制することが2009年度の課題です。

- ①対象は、共有部分、ジャスコ、テナントも含むSC全体
- ②mozo wondercity、大津ショッピングプラザを除く
- ③()内は対前年比
(2007年上期は旧ダイヤモンドシティ分を含む)



2009年度に取り組む著しい環境側面

業務	環境側面	環境負荷内容
現在業務	お客さま・従業員が来店・帰宅する	エネルギー・資源を使う
	SC共用部分でエネルギーを使用する	エネルギーを使う
	SC館内で空調する	エネルギーを使う
	テナントがエネルギーを使用する	エネルギーを使う
	設備が古い	エネルギーを使う
	運転管理基準がSCで異なる	エネルギーを使う
事故・緊急事態	CO ₂ の2006年度比総量での排出超過	地球温暖化防止
	浄化槽・下水の排水基準値超過	水質汚濁
	床清掃・剥離剤のSC側溝への流出	負傷者の発生・建物損傷
パートナー様	廃棄物業者	廃棄物処理
	燃料小売業者	ガソリンスタンド
	清掃業者	剥離剤使用
	設備管理会社	地球温暖化防止

事業に関わる主な環境関連法規制

場面	関連法規制
SCの立地に関して	大店立地法・環境アセスメント法
SCの建設・増改築時	建設リサイクル法
事業から出るごみについて	廃棄物処理法
SCからの排水について	下水道法・浄化槽法・瀬戸内海環境保全措置法
SCのエネルギー使用について	地球温暖化対策法・省エネルギー法
設備に関して	
重油タンク	消防法・水質汚濁防止法
常用発電機・ボイラー・冷水発生器	大気汚染防止法
送風機・クーリングタワー	騒音規制法
設備等の使用済み処理時	
パッケージエアコン・空調用チリングユニット・ガスエンジンヒートポンプ	フロン回収破壊法
冷蔵庫・エアコン・洗濯機・テレビ	家電リサイクル法
社用車	自動車リサイクル法

次世代へ美しい環境を引き継ぐエコモールへ

大規模な設備投資から日々の地道な取り組みまで。
すべての従業員が目標を共有し、総合的な活動に取り組んでいます。



専務取締役 営業本部長
山中 千敏

東京電力とのタイアップでイオンモールむさし村山ミューに導入した「NAS電池」は、夜の電気を蓄えて昼間に放電することで電力使用を平準化するシステム。今後のトレンドになる可能性があると考えています。



環境への取り組みが日常業務として定着。
目標達成へ向けて意思統一が進んでいます。

共用部CO₂排出量の削減目標



2012年度のCO₂排出量を2006年度比で30%削減するという目標達成に向け、2008年度もさまざまな活動に積極的に取り組んできました。すべてのモールで高効率な設備の運営管理や制御を行うためのマニュアルを導入したほか、既存店舗のエネルギー関連設備を比較検証し、今後の採用・運営についての方向づけを行いました。さらに本社では部署の垣根を越えたプロジェクトチームが編成されるなど、6年計画の後半に備えた体制も整えています。

2008年度は4SCがオープンした影響もあって当初の全体目標値は達成できませんでしたが、既存SCベースではほぼ目標通りにCO₂排出量の削減が進められました。もちろん新店には最先端の省エネルギー設備が備えられています。

数値的な成果もさることながら、従業員の環境に対する意識の高まりには目覚まし

いものがあります。高い目標を共有することで全社的な意思統一が図られ、いわばプラスアルファだった取り組みが日常業務として定着しつつあります。こうした士気の高まりを受けて、環境活動を人事考課や表彰の対象に組み入れることも検討しています。

CO₂排出量を大幅に引き下げるためにはハード面での大規模な投資が必要なことは事実です。しかし設備を活用するのは人ですから、すべての従業員に意識が浸透していなければ目標達成はありえません。

またお客さまには館内の温度設定などではご理解・ご協力をお願いする部分もありますが、これまでと同様に気持ちよく買い物をお楽しみいただけるよう十分に配慮しています。現在もエコステーションなどで環境への取り組みをご紹介しますが、今後はよりわかりやすくお伝えしていく必要があると考えています。



管理本部 CSR推進部長
矢島 誠

CSR推進部にCO₂対策グループを新設

当社では2012年度のCO₂削減目標を達成するために社内体制をさらに強化しています。CSR推進部に専門部署としてCO₂対策グループを新設するとともに、2008年度から開発本部、建設部、営業本部、管理本部にまたがる「CO₂削減委員会」を組織し、毎月の成果と課題を確認することにしています。

また省エネ法改正に対応するため、エネルギー管理統括者に管理本部長が、エネルギー管理企画推進者にCSR推進部長が着任するなど管理組織を強化し、経営的視点をふまえ、中長期計画作成のとりまとめを進めます。



ごみを「見える化」することで 廃棄物削減を促進しています。

廃棄物については、17品目の分別を基本にリサイクルを推進するとともに、計量システムの導入も進めています。廃棄物が品目別に計量でき、排出量の推移も把握できるため、リサイクル率の向上とともに廃棄物の削減にも効果をもたらします。今後はテナントの業種別に廃棄物の内容を分析したり、排出量を一覧にして各テナントにフィードバックしたりすることで、さらなる削減のための意識づけを図っていきます。

また、各モールの館内には分別ごみ箱を配置し、お客様にもリサイクル回収へのご協力をお願いしています。



廃棄物は17分別を基本に、種類別に分けリサイクルへ

イオンモールさんが取り組む廃棄物の分別は他の商業施設とくらべても先進的だと思います。ほとんどのテナントさんがルールをきちんと守っていますが、改善を要する点が見つかった場合は随時ご報告しています。



(株)宮崎環境開発センター
荒尾 道輝 様・黒木 久雄 様
イオンモールMiELL都城駅前

17品目の分別と2008年度リサイクル率 (サーマルリサイクルを含む)

1 生ごみ	74.0%
2 段ボール	100.0%
3 雑芥	50.8%
4 廃プラスチック	98.1%
5 ビン	99.9%
6 缶	99.5%
7 発泡スチロール	100.0%
8 廃油	100.0%
9 紙類	100.0%
10 粗大ごみ	71.2%
11 その他不燃ごみ	81.6%
12 廃蛍光灯	63.2%
13 廃電池	83.0%
14 割り箸	97.9%
15 廃アルカリ、剥離剤	96.8%
16 汚泥	83.2%
17 廃エンジンオイル	100.0%

*雑芥：これ以上分別できないごみ

排水基準を順守するために

飲食店が集まるショッピングモールにとって、排水基準を順守することは重要な課題です。そのため、排水の除害施設の運用方法や規模を検証し、設備の導入や運用の基準を定めました。飲食店厨房では毎日のグリストラップ清掃と定期的な水質測定を実施しています。

環境活動にあたってはテナントさまの従業員による協力が欠かせません。毎日の行動が環境にどんな影響を与えるのかをわかりやすくまとめたハンドブックを配布しているほか、緊急連絡先を明記したポスターを後方に掲示し、万一の際の被害を最小限にとどめられるように努めています。



グリストラップ清掃



次世代へ美しい環境を引き継ぐエコモールへ

最新鋭のモールにも、長く地域と寄り添うモールにも。
自然と共生する精神が貫かれています。

イオンモール草津

地域を大切にする想いと最新の環境設備で CASBEEの最高ランク“S”を獲得。

2008年11月にオープンしたイオンモール草津。隣接する琵琶湖は関西1,400万人の水源地であるだけに、その開発は特に慎重に進められました。計画が立ち上がった段階でまず着手したのは、周囲の植生や生態系の綿密な調査です。

その結果、建設予定地の水田の一角に、環境省レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている「ミズタカモジ」が見つかりました。この稀少な多年草は、モール建設中は一時的に近くのビニールハウスに移して養生され、オープン後は敷地内に復元された水田で保全されることになりました。

エコステーションで飼育。琵琶湖にすむ魚を間近にご覧いただけることから、お客さまからもたいへん好評を博しています。

さらにイオンモール草津では、それまで使い道がないと思われていた浚渫土まで有効に活用しています。琵琶湖の底から引き上げられた汚泥を滋賀県伝統の信楽焼の土と7:3の割合でブレンドして焼き上げ、モールの壁面タイルなどに利用しているのです。浚渫土の割合を高めつつ強度を確保することはたいへん難しく、試行錯誤の末に実現しました。

最新の環境設備を投入するだけではなく、徹底した調査を重ねて建設前の環境を保全し、その地域ならではの素材や伝統技術までも活用したエコモールづくり。こうしたハード/ソフト両面での取り組みが高く評価され、イオンモール草津は建築物の環境性能を総合的に評価するCASBEEにおいて最高ランクのS評価を初めて獲得しました。



イオンモール草津
ゼネラルマネージャー 下岸 春雄
オペレーションマネージャー 安斎 武男
営業マネージャー 志賀 幸紀

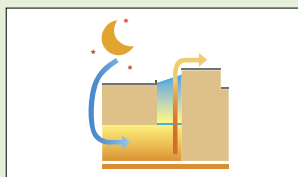


敷地内の水田でお客さまと田植えを行いました。

また、琵琶湖博物館の協力を得て、一般の捕獲が禁止されているイチモンジタナゴをはじめ、ニゴロブナ、ドジョウなどを



環境への負荷を軽減する最新設備



ナイトバージ
夜間の冷えた外気を館内に導入し、冷房の立ち上がりにかかるエネルギーを削減します。



LED照明
消費電力が少なく耐久性に優れたLED照明への切り替えを進めています。



太陽光発電*
館内のボードでは発電状況と削減したCO₂量がひと目でわかります。



氷蓄熱冷房*
電力消費の少ない夜間の電力で製氷蓄熱し、昼間の冷房に利用します。

*設置SCについてはP30-33をご覧ください。

京都ファミリー

時代に先駆け、27年前に屋上緑化を実現。 世代を超えて地域から愛されるエコモール。



3階のスイミングスクールは会員約2500人。ファミリーの名の通り、世代を超えてご愛顧をいただいている店舗です。



京都ファミリー
ゼネラルマネージャー
中谷 宜弘



1982年の開店以来、地元のお客さまから堅実に支持され続けてきた京都ファミリー。日頃はお客さまが目にする機会のない屋上は、オープン当時から鮮やかな芝生で覆い尽くされています。今でこそ屋上

や壁面を緑化する試みはめずらしくありませんが、まだ環境問題がそれほど注目されていなかった時代に、なぜこのような取り組みが行われたのでしょうか。

「隣接するマンションからの景観に配慮したのがひとつ。さらに空調への負担軽減も図ったと聞いています」と話すのは中谷ゼネラルマネージャー。他のモールと比較しても夏季の室内温度を下げる効果は確かに実感できるそうです。

屋上の大半を占める芝生は年に2回ほど業者が刈り取りを行なうほかは特別なメンテナンスも施さず、ほぼ自然に委ねて育てられています。そもそも屋上にこれだけの土を入れるだけで建物に相当の負担がかかるはずですが、今もまったく問題は出ていません。

「3階には大きなプールもありますが水

漏れしたことはありませんし、先ごろの調査では高い耐震性能が証明されています。決して新しい建物ではありませんが、当時にしては相当にしっかりした造りであったことが伺えます(中谷GM)」



店内でひとときわ目を引くのが、いかにも京都らしさを感じさせる小粋な日本庭園。ここでは毎年立派な竹の子が収穫されるそうです。時代を先まで

見通したかのような、自然と共生するコンセプトが随所に見て取れます。

この京都ファミリーは今後10年にわたって計画的に設備を交換しながら、地域に根ざしたSCとして運営されていきます。今あるSCもいずれは20年、30年と歳月を重ねていきます。そのためのノウハウがここできちんと積み上げられています。



京都ファミリーのスタッフ

次世代へ美しい環境を引き継ぐエコモールへ

環境に対する取り組みは
テナントさまとも歩調を合わせて行なわれています。

京都ファミリー



SunEver Coffee 京都ファミリー店
島崎 志織 様

このお店は私が生まれる前からあって、ずっと通ってくださるお客さまが多いんです。中には「私も昔ここで働いていたのよ」とおっしゃる方もいらっしゃいます。



モールでのアルバイトを通じて、 自宅でも環境に配慮するようになりました。

私が働くコーヒーショップでは、日頃からみんなで省エネに取り組んでいます。開店するまで照明は最低限しか使いませんし、レジも直前に立ち上げます。冷蔵庫は詰め過ぎに注意して温度をこまめにチェックし、水道を流しっぱなしにするということもありません。

アルバイトをはじめたころは環境やエコと言われてもあまりピンと来なかったのですが、店長はただこうしなさいと指示するだけでなく、なぜそれが必要かをきちんと説明してくださるんです。そうすると身近なところに小さなムダがあったことが納得できて、やがては自分から何ができるか考えられるようになりました。モールの研修でいただいた小冊子も参考になっています。

今はひとり暮らしをしているのですが、お店で学んだことはできるだけ家でも実践するようにしています。使わない電化製品のコンセントをこまめに抜いたり、自転車やエコバッグを積極的に使ったり…これからの日常生活でできることを無理なく続けていきたいと思います。



いつも笑顔で指導してくださる店長の正楽井さんと。

モールで働くすべての従業員を対象に、環境教育・啓発を実施

各モールが環境目標を達成するためには、パートナーであるテナントさまとその従業員の協力が欠かせません。イオンモールではすべての従業員に対して、入店時をはじめ定期的に環境教育を実施するとともに、従業員専用の小冊子も配布。勤務中の取り組みはもちろん、通勤に公共交通機関を利用することなども積極的に呼びかけています。



エコドライブ読本



省エネ読本



イオンモールMiELL都城駅前

農家が喜び、野菜が喜び、 食べた人も豚も幸せになるのがいちばんです。



(株)はざま牧場
代表取締役 間和輝 様
専務取締役 間健二郎 様

畜産業と農業を理想的に
循環させるのはざま牧場さんの取
り組みに共感し、モールへの出
店をお願いしました。



イオンモールMiELL都城駅前
ゼネラルマネージャー
野口 誠

地元はもちろん、県外にも“きなこ豚”
のブランドで広く知られる「はざま牧場」。
イオンモールMiELL都城駅前には直営の
売店だけでなく、初めてとなるイトイン
コーナーも出店されています。



はざま牧場はモールから車で20分ほど。
地元の木材業者から引き取ったおがくずを
敷き詰めた豚舎は清潔で、臭いもほとんど
ありません。ここで厳選されたトウモロコ
シ、大豆粕、魚粉、そして栄養価の高いきな
こを与えて育てられた豚は、独特のまろや
かさと甘みが高く評価されています。

「生まれてから出荷まで約180日。夏は
涼しく、冬は暖かくして、栄養があるもの
を与えれば豚が恩返しをしてくれる」と話
すのは代表取締役の間和輝さん。その「恩
返し」で実現したのが、畜産業と農業を組
み合わせた理想的な循環サイクルです。

豚・牛から排出された廃棄物から生産され
た良質な有機質肥料は、自社で育てる野
菜に用いられるだけでなく、県内外の農家
からも「収穫量が増えるうえに育ちも味も
いい」と絶大な評価を得ています。

「農家が喜び、野菜が喜び、食べた人が
喜んでくれるのがいちばんです」と間さん。
化学肥料に頼らず、土壌の保温性、排水
性、通気性を高め、微生物群を改善し、地
力を高めながら肥料成分を長く安全に供
給できるのが強みとのことです。



無駄をできるだけ減らし、自然が本来
持っている力を最大限に利用する試み。イ
オンモールはこうしたテナントさまの活動
とも歩調を合わせて環境保全に取り組ん
でまいります。

「電車で行けるイオンモール」は利便性と環境改善の双方に貢献



かつては郊外立地が主流だったイオンモールです
が、現在では全体の約3分の1のモールが最寄り駅
から徒歩圏内に位置しています。これにより車を運
転されない方でもお気軽に立ち寄れるようになっ
たほか、お客さまや従業員が自家用車の利用を減ら
すことでCO₂を削減できるメリットがあります。また
モール周辺の渋滞を緩和する試みとして、沿線の駅

周辺の提携駐車場に駐車してご来店された方に特
典を提供する「パーク&ライド」と呼ばれる取り組み
も一部のモールで進められています。

中でもイオンレイクタウンKAZEでは、交通系の
ICカードをJR駅改札と店内の両方でタッチすること
で「グリーンスコア」をためて景品と交換できるなど、
鉄道会社と連携した企画を実施しています。